Japanese association of educational psychology

PC 20

現代日本における成人期の人格発達の検討
—成人期に特有な意識変化と日本的人間関係に着目して—

若本　純子
（お茶の水女子大学大学院　人間文化研究科）

【問題・目的】

現代社会の高齢化、雇用・景気の悪化を鑑み、発達的・臨床的観点から成人期への注目は高まっている。本研究では Levinson（1978）の「生活構造」概念に則って、成人の人格発達が個人と社会の相互作用によって生ずるものと仮定し、個人化と社会化への２志向性は共存的に統合に向かって発達していくとする伊藤（1993）の尺度を人格発達指標として用いる。そして成人期に特有とされるさまざまな心理的経験や意識変化、外界と自己の接点にある人間関係の様態および人間関係観に着目し、現代日本における成人期の人格発達がどのような構造と特徴を持つのかを検討する。

【方法】質問紙調査

調査時期：1999 年 8 月～9 月。対象者：23～59 歳成人男女。内容：①「個人志向性・社会志向性尺度」（伊藤 1993）②「成人期の意識変化尺度」（伊藤 1995）③現状肯定感④日本に特徴的とされる人間関係を示す項目を中根（1967）から抽出し作成した「日本的人間関係尺度」⑤フェイス項目。手続：郵送、手渡し。回収は 712 名（64.73%回収）。無効分を除外し 664 名を調査対象とした。内訳は 20・30 代（成人前期）男性 134 名、女性 203 名。40・50 代（成人後期）男性 124 名、女性 203 名。

【結果と考察】

2 志向性の合計得点を人格発達得点とし、性別×成人前期・後期による分散分析を行ったところ、交互作用は見られず、性別($F(1,608)=7.46, p<.01$)、年齢($F(1,608)=19.74, p<.001$)の主効果が有意であった。これは成人の人格発達は加齢によって進み、そのプロセスには性差が存在するという先行研究に一致する。さらにこのような人格発達はどのような構造を有するのか、また年齢、性別による差がどういった要因によるものか、分散分析の結果を踏まえ性別×年齢の 4 群別に重回帰分析によって検討した。独立変数として、②の下位尺度「転機・葛藤」「自立」「限界感」「自在感」「協調・親和」、③「現状肯定感」、④の下位尺度「情緒性」「場依存」「消極性」「高配慮」の 10 変数を用い、結果を表 2 に示した。前期において最も高値だったのは、男性では「消極性」、女性では「現状肯定感」であった。ここから前期男性においては、人間関係に消極的で社会との相互作用の機会を減じることは、人格発達に最も顕著な負の影響を及ぼすと想定される。前期女性における「現状肯定感」の人格発達への影響の大きさは、前期女性にとって、結婚、出産といったライフイベントを経験することが自己の現状に対し大きな満足や充実感をもたらすであろうことや、女性が元来持つ他人との関係性の中で生きる傾向ゆえに、人間関係観や様態に個人差を生じにくいとの推測も可能であろう。また成人期に特有の意識変化において、男性では、社会において役割を果たし承認される「自立」が高い影響を示し、前期女性では自分らしさやものの見方の確立である「自在感」の経験が高い影響度を示したのは、成人発達の性差を質的に考察する上で興味深い結果と言えよう。

表 1　人格発達（2 志向性）得点の性別×年齢の分散分析結果

	男		女		F値	
	前期	後期	前期	後期	性別	年齢
2志向性	3.71 (.48)	3.90 (.39)	3.64 (.44)	3.77 (.44)	7.46	19.74

表 2　人格発達（2 志向性）得点の重回帰分析結果

	男・前	男・後	女・前	女・後
転機・葛藤	-.083	.146	-.085	.027
自立	.207	.163	.110	.073
限界感	-.157	-.336	-.087	-.070
自在感	.168	.289	.247	.258
協調・親和	.174	-.081	.177	.040
現状肯定感	.195	.116	.361	.199
情緒性	-.070	-.130	-.109	-.008
場依存	.078	.028	.021	.029
消極性	-.253	-.201	-.113	-.200
高配慮	.001	.202	.129	.147
R^2	.495	.382	.492	.333

成人後期では、女性は「自在感」と「消極性」が主たる説明変数であった。「自在感」は前期女性においても人格発達への高い影響度を示し、成人女性の発達には、自分らしさの実感、そこから生じるありのままの自分を受け入れのびやかに生きるという側面が重要であることが示唆される。一方、男性では「限界感」が最も高い値を示しこの群を特徴づけている。後期男性は、高い社会的地位や社会からの承認を背景に、喪失への恐れや不安も相応に大きいことが想定され、「限界感」の顕著な影響は頷ける。「限界感」は“中年の危機”と呼応すると思われるが、女性ではさほどの影響を示していない。ここから男性と女性では、自らの限界に対する認知や受容に差があると考えられ、異なる中年期の様相が示唆されよう。

NII-Electronic Library Service